

2025年3月23日（大齋節第3主日、C年）

牧師メッセージ

「履物を脱ぐ」

（ルカによる福音書13：1-9）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音後半の「いちじくのたとえ」では、主人は三年間も待ったにもかかわらず、実をつけなかった木を「切り倒せ」と園丁に命じます。しかし、園丁は「来年には実がなるかもしれません」と願います。このたとえを、主人が神で、園丁をイエスと読むこともありますが、むしろこの主人と園丁のやり取りには、神の葛藤が表されているように感じます。神は、神の呼びかけを無視し、実りをもたらさない人間を裁くことの方が当然でありながら、一方ではあと一年、あと一年と待ち続けてくださるのです。ペトロの手紙Ⅱには、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」とあります。神が一年忍耐するということは、人の想像を絶するほど忍耐してくださることなのです。そしてその間も「木の周りを掘って、肥やし」をやるように、神はわたしたちのことを養い、導き続けてくださいます。その神の愛と恵みをいただいて、私たちはこの与えられた「一年」をどう過ごすのかが求められています。